

「文学者」としての従軍——盧溝橋事件以前の文学者の役割自任

中川拓哉

(ドイツ文学専門／博士候補研究員)

はじめに

ある集団・共同体において特定の地位・役割には社会的に共有される期待がある。この社会的役割は、文学者の場合どのようなものだろうか¹。戦時下の日本において文学者の社会的役割を最も問題化した契機の一つが 1938 年 9 月から派遣された「従軍ペン部隊」である。ここで彼らは「兵士」ではなく「文学者」として戦地に乗り込み、「文学者」としての国家貢献を試みた。

ペン部隊についてはすでに少なくない先行研究がある。従軍ペン部隊という企画自体の成立背景を論じたものや、林芙美子や岸田國士らペン部隊に参加した個々の作家に焦点を当てたものなど、多様な観点から考察されている。またペン部隊には加わっていないものの火野葦平の兵隊三部作や石川達三の『生きてゐる兵隊』をめぐる研究も、その直後に企画されるペン部隊さらにはアジア・太平洋戦争下における日中戦争下での文学者の役割を考察するうえでは重要である。

これまで従軍ペン部隊を対象とする考察では、盧溝橋事件を発端として「戦時」の拡大の中で文学者が果たした役割を論じられることが多い。本論文では盧溝橋事件以前の日本の言説空間を、小林秀雄・戸坂潤の評論から概観し、ペン部隊へと至る文学者らが自任する文学者としての役割意識を検討する。

1. 「インテリゲンチヤ」とマルクス主義

「文学者」という役割意識を論じるためには、同時に「知識人」という役割意識にふれずにはいかない。「文学者」と「知識人」は必ずしもイコールではないが、世論を主導する存在として、国における思索の担い手としての「知識人」あるいは「インテリゲンチヤ」という自任は「文学者」たることの前提的な要素の一つであった。

「知識人」とは単に教養豊かである人、博識の人という意味にはとどまらない。サイードの『知識人とは何か』*Representations of the Intellectual*(1994)では、「知識人」the Intellectual は「公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、メッセージなり、思想なり、姿勢なり、哲学なり、意見なりを、表象＝代弁 represent し肉付けし明晰に言語化できる能力にめぐまれた個人」と説明されている²。サイードは、理念に基づきいず

¹ 本稿では引用史料における語用に則り、「文学者」は、文学研究者以外にも作家、批評家など広く文筆業を営む者を指す言葉として用いる。

² サイード(1994)、37頁。

れかの立場を表明し、人々の反感を買ってでも、強大な権力に対しても批判を恐れな
い者こそが知識人の理想と述べ、専門家として特定の領域や権威に従属する姿勢を批
判する。

サイードは本書の中で日本の知識人たちにも触れ、共同体の現在的な利益と知識人
たらしめる理念の狭間で苦悩した存在とみなしている。

共同体から発せられる義務と、知識人がどちらの側につくかという問題とが悲劇
的なかたちで問題化し、知識人を苦しめるにいたった近代国家といえ、日本を
おいてほかにあるまい³。

戦時下の日本において、権力側の要請と「知識人」としての理念の相克がいかに「悲
劇的」たらしめたのか。ペン部隊企画は知識人の権力側への屈服であったのか。この
問題を正しくとらえるためには「知識人」という語が持つ日本独自の立ち位置を考慮
しなければならない。

「知識人」という語は第一次世界大戦後マルクス主義の流入のなかで「インテリゲ
ンチャ」の訳語として日本にもたらされた。同時にそこには「階級」という新たな概
念が付随した。丸山真男が指摘したように、マルクス主義は「国家」と区別される「社
会」、「世間」から分断された「階級社会」という新たな認識をもたらしたのだ⁴。

やがて「インテリゲンチャ」という概念は次第に俗化し、同じくマルクス主義から
もたらされた「階級」概念と組み合わせられ「知識階級」という語も用いられるよう
になった。たとえば新井格は「知識階級」を次のように説明している。

次ぎに知識階級の意味だが、これに就いても寛厳それぞれの解釈が付せられる。
厳密に規定するなら、インテリゲンツィアとは彼等の有する知識を以つて社会を
合理的に批判し、その批判を通して当為社会の姿態を認識するものでなければな
らない筈。しかし漫然と知識階級を概念して、学校若くはそれに類似の機関によ
つて知識を習得し、知識階級人たることを自任もし、他からも大体左様に認めら
れたものを総称してゐる場合もある⁵。

マルクス主義的理解に基づく「インテリゲンチャ」像とともに、高等教育を修了し
た「知識階級人」としての自負による「知識階級」像があった。この教養人としての「知
識階級」に対置されるものが「大衆」である。「知識階級」と「大衆」の対立構図は、
文学においては「純文学」対「大衆文学」、映画においては「外国映画」対「日本映画」
のように様々な領域で見いだされ、両者の隔絶は第二次世界大戦後に至るまで重要な

³ サイード(1994)、80頁。

⁴ 丸山(1961)、74頁。

⁵ 新井(1936)、133頁。

文化的問題であり続けた⁶。

新井が紹介するような「階級」としての知識人理解を、マルクス主義者の戸坂潤は批判した。戸坂によれば「知識階級」という「社会科学的に云えば非科学的な俗流概念」が用いられる理由は、知識・知能に基づき自身らを「支配者階級」とみなす日本のインテリゲンチヤ自身の姿勢に求められる⁷。

一体インテリが自分はインテリ集団にぞくするという一種の集団意識（それがやがて階級としての自覚を産む所以を私は最初に述べた）に立って、予め自負を感じ、そしてその自負が失われれば、自卑にかられ、自卑しながら自卑そのものを自負の材料にせずにはいられないという心根からは、インテリゲンチヤを飽くまで一種の優先的な歴史的役割を独占した社会原動力として見ようとする欲望以外の何ものも出て来ない⁸。

日本に新しくもたらされたマルクス主義は「インテリゲンチヤ」という新たな社会的役割を提示すると同時に、従来の教養を身に着けた存在としての「インテリゲンチヤ」に、その主導的役割の自任について再考を迫るものだった。ここで戸坂は、マルクス主義からの批判に動揺し「自卑」にまで至るインテリゲンチヤが、むしろ嘆きによって「インテリゲンチヤ」としての重大な社会的地位を表明する「自己誇張癖」を露にしていると批判している⁹。

第一次世界大戦後、マルクス主義思想は急速に日本の言説空間に浸透し、文学にも重大な影響をもたらしたことは周知のとおりである。マルクス主義は「科学的」姿勢として論理的構造を持つ「世界観」という新たな認識体系を提示した。丸山真男は、日本文学は伝統的に「実感」への信仰があり、日本近代文学の制度的「近代」へのまなざしを欠くことを指摘する。「実感」に密着する文学者にとって、マルクス主義が標榜する理論や公式、抽象化は「精神的暴力」であり、強く反発したのだった。マルクス主義の姿勢は「理論」・「思想」というもの自体への支持者の物神崇拜的姿勢を招き、一方で反対者から翻って「思想」・「理論」・「抽象性」自体への批判を一手に引き受けることになった¹⁰。

丸山は日本の文学者たちの大半が官僚機構・家・政治運動からの遁走者、既存の社会体制から離脱した非エリート層である点に特色を見る。彼らは自分たちを排除した近代的な制度、抽象的概念、社会的地位や名誉に反発し、その反抗姿勢を「伝統化」

⁶ 外国映画と日本映画の客層には明らかな隔絶があった。外国映画が大学生や都市の競争市民層に支持される一方で、日本映画は労働者・女性・子供に人気があったという。詳しくは古川(2003)を参照されたい。

⁷ 戸坂(1935)a、292頁。

⁸ 戸坂(1935)a、296頁。

⁹ 戸坂(1935)a、303頁。

¹⁰ 丸山(1961)、57-58頁。

した¹¹。日本の文学者たちの「抽象性」への反発については小林秀雄が当時から指摘していた。小林によれば、日本の文学者の抽象的思考の「未熟さ」は「伝統」であり、「気質文学主義」な日本の伝統において作家たちは、抽象的思考に対し「侮蔑感」をなおも抱き続けているという¹²。

しかし一方で近代日本全体があまりに自然科学的知見に依存していたために、ヨーロッパのロマン主義のように「科学」を否定することはできなかつたと丸山は言う。それゆえに、日本の作家たちは「狭い日常的感觉の世界」か、「絶対的な自我による観念世界への飛翔」という二択を迫られ、「ひとたび圧倒的に巨大な政治的現実（たとえば戦争）に圍繞されるとき」には、それを自然的現実と変わらない姿勢で「すなお」に絶対化したのだった¹³。

マルクス主義の流入は二項対立的図式をもたらした。プロレタリア文学／ブルジョワ文学、社会主義・共産主義／個人主義・自由主義、科学主義／文学主義、抽象・理論／実感、近代／伝統といった対立図式が挙げられる。マルクス主義者たちによってこの対立的図式が繰り返し提示され伝播した。対立概念にもとづきマルクス主義の反対者たちも自らの位置づけについて自由主義者など再定義を行い、「自由主義者」、「ブルジョワ文学」といったカテゴリーに自身を位置づけた。マルクス主義思想はひとつの準拠枠として言説空間の土台となった。マルクス主義を支持するにせよ反対するにせよ、マルクス主義思想の術語を用いて自説を構成し「科学」的に説明したのである。

2. 「日本主義」と「文学主義」の時代

河合栄治郎は1933年に発表した「自由主義の再検討」と題した論文で、「近頃の日本の思想界に著しき傾向は、国家主義の圧倒的優勢とマルキシズムの凋落と、自由主義の台頭とである」と書いた¹⁴。1931年の満州事変以降、日本国内では日本主義者が台頭し「日本的なるもの」、「日本精神」について盛んに論じられるようになった。

「日本主義者」の台頭とともに、総合雑誌でも「日本的なるもの」についての特集がしばしば組まれた。しかしこれらの特集の中で文学者たちは日本主義を全面的に支持されたわけではない。たとえば『思想』1934年5月号「日本精神 特集」の巻頭論文を、津田左右吉は次のように始めている。

「日本精神」といふ語が何時から世に現はれたのか、確かには知らぬが、それがひどく流行したのは最近のことのやうであり、所謂「非常時」の声に伴って急激に広まったものらしく思われる。断えず高い調子で叫ばれ、何となく物々しいと

¹¹ 丸山(1961)、54頁。

¹² 小林(1937)a、124頁。

¹³ 丸山(1961)、55頁。

¹⁴ 河合(1933)、38頁。

ころがあるのみならず、いひやうにより聞きやうによつては一種の重苦しい抑圧的のひびきさへも感ぜられるのは、此の故であらう¹⁵。

津田は勢いを強める「日本精神」論と「非常時」という例外状況との結びつきを示し、その「物々しさ」を指摘している。鈴木貞美は『思想』のこの特集全体は皇国思想に対するカウンター・アタックの姿勢を持っていたと分析し、1934年から1935年は言論史上の潮目にあたりとみなしている¹⁶。「日本精神」論のこの「抑圧的なひびき」は、むしろ日本主義に与しないものたちに「日本的なるもの」について議論させる動因となった。

しかしナショナリスティックな言説は拡大していった。1934年1月には、松本学警保局長を中心に、帝国文芸院設立準備会が開催された。欧米の「アカデミー」に類する組織でもって国家の文学に対する指導的役割をもたらすものであった。文芸院は多数の作家の反対によりとん挫するものの、松本はその後「文芸懇話会」を組織し、構想は継続された。ここには従軍ペン部隊にも参加する菊池寛、岸田國士も加わった。1935年3月には安田与重郎が『日本浪漫派』創刊した。1936年4月には林房雄がプロレタリア作家廃業を宣言し、以後国家主義的な論説を展開する。

ここで政治と文学は、マルクス主義全盛の昭和初期とは逆ベクトルの結びつきを見せている。国家主義的な立場から文学と政治は強く結びついていった。『改造』1934年4月号の林房雄「政治か文学か？」や、『文芸』1934年9月号の亀井勝一郎「政治と文学」など、「政治と文学」の問題は日本主義側から新たに問題化されたのである。

「非常時」において日本主義的主張が大きく展開されたこの時期、対してマルクス主義思想およびプロレタリア文学は、「非常時」のもとで徹底的な取り締まりを受け退潮していった。1933年6月、1929年に上海で反戦運動を行ったかどで収監されていた佐野学・鍋山貞親が「共産党被告同志に告ぐる書」を刑務所から発表し、1934年2月には日本プロレタリア作家同盟が解散、この頃より「転向文学」が現れ始めた。

マルクス主義の退潮と共に勢いを取り戻したのが、自由主義的言説であった。自由主義の主張は反ファシズム的立場の表明である一方で、マルクス主義からの「自由」でもあった。マルクス主義・プロレタリア文学的命題から解放され、「自由主義」を標榜するようになると「文芸復興」という掛け声も起こってきた。1935年版の『改造年鑑』では1934年を文芸復興第一年ととらえている¹⁷。この時期、宇野浩二、徳田秋声、志賀直哉ら大家が再び活動を活発にし、1933年10月には小林秀雄、林房雄らを中心として同人雑誌『文学界』が創刊されるなど新しい動きも起こっていた。

1935年版の『改造年鑑』は「文芸復興」について次のように説明している。

¹⁵ 津田(1934)、2頁。

¹⁶ 鈴木(2010)、174頁。

¹⁷ 『改造年鑑 1935年版』、282頁。

では、その『文芸復興』とはどういふものであろうか。それは、第一に、文芸が他のもの、特に政治からの抑圧を脱して、その独立性を取り戻したといふ意味である。さふいふ意味で文学のための文学といふことが認められてきたといふことである¹⁸。

マルクス主義に代わって「政治と文学」を問題とする日本主義的言説とは反対に、「文芸復興」は政治的なものからの決別を標榜するものだった。

翌 1936 年版の『改造年鑑』は「知識階級」をテーマとした議論が盛んとなった背景に、日本主義の台頭と並んでマルクス主義的な「インテリゲンチヤ」観からの解放を見て取っている。

わが国今日の知識階級論は、ファシズムの台頭に対する知識階級の問題としてだけでなく、長い間マルクシズムの文壇における活動に圧迫を感じてきた文壇の一部の感情が、マルクシズム退潮にのって表面化したといふ性質をも兼ねてきた¹⁹。

「科学性」とともにマルクス主義は文学に政治の関連付けを要求した。マルクス主義から「自由」となった「文芸復興」は、政治との関連を拒絶しようとするものであった。

戸坂潤はマルクス主義の立場から「文学のための文学」を謳う「文芸復興」を「文学主義」と批判する。

芸術至上主義はむしろ芸術乃至「文学」を意志的に生活から独立させて之を生活の上に君臨させることであったが、現代の文学主義は之に反して全生活を挙げてそのまま文学と意識的に一致せしめることにある²⁰。

「文学主義」の有する芸術至上主義的姿勢は生活を芸術に従属させようとするものとして戸坂は批判する。戸坂によれば、「文学の実質は実は出来上がったこの作品にではなくその作品の背景をなす今云った生活や意欲にこそある」という²¹。マルクス主義の観点からは、時に芸術性よりも生活こそ文学において優先されるべきものであった。

戸坂はさらに「文芸」の復興を掲げながらもその実際は、科学や生産技術含めての文芸乃至文化でなくて、単に「文学」のみの復興が念頭に置かれている点を批判する。

「文学」はもちろん宗教、神学、形而上学の復興が叫ばれる一方で、むしろ「科学」

¹⁸ 『改造年鑑 1935 年版』、282 頁。

¹⁹ 『改造年鑑 1936 年版』、193 頁。

²⁰ 戸坂潤(1935)b、273 頁。

²¹ 戸坂(1935)b、277 頁。

は打倒された旧権威とみなされていると、戸坂は主張している。続けてこの姿勢に、対立関係にあると思われる日本の国家主義的言説と自由主義的言説の親近性を指摘する。

今日の所謂「自由主義」や夫に基く進歩主義(?)の最も著しい共通特色がこの文学主義であって、之がこの頃お得意のニッポン型ファシズムと、客観的意義に於て殆ど全く同一の放列を敷いているものだということを頭から信じようとしな
いのは、之又文学主義者の独特な迷信の一つだ²²。

戸坂は日本の「自由」がまさに自由であることのみを行動信条とすると指摘する。戸坂によれば、「自由主義」はマルクス主義のような体系化された思想的基盤を持たないために容易に立場を転じうるのである。

自由主義を文字の上から解釈することは、最も馬鹿げた解釈であるが、自由主義が流行している今日では、之が案外、多くの自由主義者たちの密かな拠り所であるようにみえる。というのは、自由主義とは取りも直さず自由を主義とすることであって、従って不自由主義の反対なのだから、何れにしても悪かろう筈のないものだ、という考え方が夫である²³。

このような戸坂の文学主義という批判には、小林秀雄が答えた。小林秀雄は1937年1月の「戸坂潤氏へ」で、日本の文学者たちは「良くも悪くも危険人物などいない。根は穏健なヒューマニストだ」という²⁴。小林にとって重要なのは、「文学者たちは各自の立場を犠牲にしても、共通な意欲を発見し合はねばならない」という考えであり、マルクス主義・自由主義・日本主義といった各立場に固執する「文壇主義」の垣根を越えて日本文学を活性化させることにあった²⁵。小林は、「文学者は文壇的専門化と思想的公式化によつて貧しくなつた健全な常識を取り戻さうと努めてゐる。文学主義も科学主義もへちまもあるもんか」とマルクス主義的教条主義による創作活動の狭隘化の弊害を指摘する²⁶。

文学者の政治的姿勢の表明を求める戸坂に対し、「今日の日本の政治がはつきりした文学的問題乃至は思想的問題を提供する力を欠いてゐる事もまた事実なのだ」といって、外交問題や政治は論じないという小林の姿勢はまさに「文学主義」といえるだろう²⁷。

²² 戸坂(1935)b、277頁。

²³ 戸坂(1935)c、280頁。

²⁴ 小林(1937)a、56-57頁。

²⁵ 小林(1937)a、57頁。

²⁶ 小林(1937)a、57頁。

²⁷ 小林(1937)a、58頁。

『文学界』はこの問題を取り上げ、1937年7月号で座談会「文学主義と科学主義」を開催した。「文学主義」の側に言わせれば、マルクス主義思想は公式主義的・即物的な「科学主義」であった。いっぽうマルクス主義の側からは既存の文学に対しブルジョワ文学、自由主義的というラベリングを行った。

「文芸復興」が「文学主義」的傾向に向かった背景には、丸山が指摘したように政治は科学の意識的適用である、という命題のもとで「政治の文学に対する優位」を認め、すべてを包括する統一的な体系への無理なあてはめを強いるマルクス主義への反発があった。統制的な「科学主義」からの自由を標榜する「文学主義」は、しかし同時に政治的現実からも逃れ、ファナティックな「日本主義」的言説に対する抵抗力を形成しえなかった。「予期されたほどには具体的な運動に展開しては行かなかつた」と『改造年鑑』で述べられている1935年の天皇機関説事件へのリアクションはその一例である²⁸。日本主義からもマルクス主義からも「自由」であろうとした自由主義からの「知識階級」をめぐる議論は、やがて「大衆」に対する「文学」のアプローチの問題として論じられる。

3. 「文学者」と「大衆」

盧溝橋事件以前から小林は繰り返し「大衆」に対する文学のアプローチの必要性を訴えている。小林秀雄は「大衆」を通じて現代日本社会と文学のつながりを重要問題として意識しており、大衆に対する関心は「文学離れ」に由来している。小林は「従来のブルジョワ文学もプロレタリア文学も一般読者を獲得することに失敗し、純文学の不振が叫ばれるやうになり、日本といふものにつき、大衆といふものにつき再び文学者が考へ込まねばならぬ時が来たのだ」という²⁹。

また小林は、1937年4月の「「日本的なもの」の問題」というエッセイでマルクス主義流入以降の日本文学史を概観し、マルクス主義思想流入後の、術語の氾濫、教条的命題、論壇のセクト化による文学の「専門化」が一般読者を文学から遠ざけたと主張する。

文壇は外来思想の実験所と化した。而もこの実験は文壇の外には殆ど通用する事がなかつた。それ許りではない、文壇内でお互に理解出来ない言葉で論戦しなければならなかつた。文学的専門語としても未熟だし、文壇の方言としても板につかぬ様な言葉を盛に使用して批評家たちが議論してゐる間、実際の作品の制作の上でも真に新しい社会的な文学は生まれなかつた。民衆は専門化した文壇に見切りをつけて大衆文学に走つた³⁰。

²⁸ 『改造年鑑』(1936)、186頁。

²⁹ 小林(1937)a、59頁。

³⁰ 小林(1937)b、109-110頁。

民衆からの階級意識ではなく、「インテリゲンチヤの性急な民衆啓蒙運動」として現れたマルクス主義思想を、ブルジョワ文学側も理解していなかったのである。

小林は「日本的なるもの」も大衆の問題に関連付ける。「日本的なるもの」が声高に叫ばれる背景には「現代の不安」という問題と切り離しては考えられない。「日本的なるもの」がなんであるかを云々してもどうにもならない。「日本的なもの」を理論にて定めようとする事の無益であり、大事な点は問題自体にあるより問題の起り方にある。起り方を考えれば「大衆的なるもの」という問題と引き離せない。一般読者が突き付けたのが、「純文学の貧困」という事実に関連するという³¹。

大衆の文学離れは満州事変から間もないころにすでに指摘されていた。たとえば1933年版の『朝日年鑑』は、「通俗大衆的の作品は相変わらず益々需要が旺んであるのに対して、純文芸の作品は愈々その需要が狭められつつあり、文士の貧窮生活救済をさへ叫ぶ一部の作家が純文芸方面にはある程であつた」とこの年の文学界の状況について書いた³²。プロレタリア文学含め純文芸の需要の低下が指摘されていた。

『改造』1935年4月号に掲載された横光利一の「純粹小説論」も大衆への関心が根底にある。横光は「純文学にして通俗小説」、「通俗小説と純文学とを一つにしたもの」を「純粹小説」と呼び、今後の小説のいくべき道であると主張した³³。『改造年鑑 1936年版』はこれを「社会的関心」の目覚めと評している。

単に通俗文学と純文学との問題ならば昨年も論じられないではなかつたのであるが、その場合には、通俗文学は純文学の敵として排撃せられた。今年は、純文学と通俗文学とをなにかの形において結びつけようとする考へが勢を得、これが議論されたのであつた。これはひとつには、作家の生活の問題から、ひとつには、文学をより広い民衆にはたらき掛けるものとしようとする社会的関心の目覚めから導かれたものゝ如くである³⁴。

「純文学」と「大衆文学」の間には戦後にまで至る隔絶があつた。1930年代後半にあつて純文学を任ずる人々から「大衆」へのアプローチが図られたのだつた。これは政治へのコミットメントを拒絶する「文学主義」からの社会的かかわりの模索であつた。マルクス主義への反発と文化統制の強化のなかで、「文学のための文学」が志向されるなかで、かつてマルクス主義が要求した文学の社会への積極的働きかけは、通俗文学に接近することによってはかられたのである。

おわりに

³¹ 小林(1937)b、108頁。

³² 朝日新聞社(1932)、657頁。

³³ 横光(1935)、302頁。

³⁴ 山本編(1936)、222-223頁。

1937年7月、盧溝橋事件が勃発し日中戦争がはじまった。翌8月には戦線は中国全土へ拡大した。近衛内閣はマスメディアに協力を要請した。新聞雑誌社などのメディアはそれぞれ独自に特派員を戦地に派遣し少しでも早いニュースを求めた。やがて商業作家が特派員として戦地に赴き従軍、帰国後ルポルタージュという形式で体験を報告し始めた。早い例では8月3日に東京日日新聞が吉川英治を特派員とし天津に派遣した。吉川は帰国後、『迷彩列車』を東京日日新聞に連載する。東京日日新聞からは続いて木村毅が上海に向かった。主婦の友は吉屋信子を天津・上海に、中央公論から林房雄が上海へ、尾崎士郎が華北へ向かった³⁵。8月の間にすでにこれだけの作家が戦地へ派遣されたのである。

「事変」の勃発からまもなく相次いで産み出された「従軍報告」は大衆・社会とのコミットメントを、表向きには「イデオロギー」を除いた形で、求めていた文学者たちにとって絶好の機会であった。プロレタリア文学作家の宮本百合子は1937年12月に発表したエッセイでその点を指摘した。

この現象は、本年のはじめ頃から日本の文学者の一部の間に特殊な傾向をもって強調されていた作家の社会性の拡大への要求、大人の文学への要求、国民の文学と称せられるものへの要求と根をつらねた文学的性格を具えている点においても、文学上相当の意味をふくんで立ちあらわれている事実である³⁶。

これらの従軍報告は必ずしも高い評価を得たわけではなかった。しかしそれ故に「従軍報告」作りは文学者たちにとって「文学者」という地位から戦争に、ひいては国家・社会・大衆にコミットする重要な契機となったのである。

同時に「知識階級」論も、戦時において何をなすべきかという観点から語られるようになった。1938年の『出版警察資料』は、「事変を契機として文化機関の国策的動員」が論壇の当面の課題として論議の中心になるとともに、「知識階級批判」が高まっていると報告している³⁷。『文学界』5月号では「座談会 知識人の立場」が開催され、林房雄らによる『新日本』は5月号「知識階級と大衆」、6月号「時局は知識人に何を要求するか」を特集した。『文芸』7月号は「座談会 欧州よりかへりて日本知識人に与ふ」を開催した。文学者の役割については、『新潮』7月号で室生犀星、亀井勝一郎、板垣直子、林房雄、中村武羅夫らにより「国策と文学者の役割」について評論が寄せられた。これらの大部分は国策に従い、文学者も積極的に協力するよう説くものである。

³⁵ 木村毅は「上海従軍日録」を『東京日日新聞』に、尾崎士郎は「悲風千里」、林房雄は「上海戦線」を発表した。

³⁶ 宮本(1937)。

³⁷ 内務省警補局(1938)、44頁。

プロレタリア文学の登場は文学を通じた社会改革の可能性、作品の社会性という新たな観点と可能性を提示したが、同時に文学の価値の一切をそこに求める強迫観念ともなっていた。言論統制によってプロレタリア文学が退潮した後も、「非常時」における国家貢献、国家総動員のなかでの文学者としての参画が模索されていた。言語の専門家であるという「文学者」の立場でもって国民の心理に働きかけ、あるいは国民の心理を代弁するという課題でもって、失われつつあった「文学者」としての社会的役割を再び見いだしたのだった。

参考文献

- ・引用箇所の出典は、著者名とその後ろにオリジナルの初版の出版年を記す。
- ・翻訳があるものは翻訳を参照した。翻訳書の該当ページを記した。翻訳書を引用した場合、著者名をカタカナで表記した。
- ・同一著者による同一年に出版された複数の文献は、西暦の後ろにアルファベットを付け区別する。
- ・引用中の旧字は新字に改めた。

Saido, Edward W. (1994): *Representations of the Intellectual*. (大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社 1998年)

赤澤史朗(1987)「日本ファシズムと大衆文化」、『日本史研究』295号。

朝日新聞社編(1932)『朝日年鑑 昭和8年版』。

新井格(1936)「新聞小説と知識階級」、『文芸』1936年12月号。

『改造年鑑 1935年版』

『改造年鑑 1936年版』

河合栄治郎(1933)「自由主義の再検討」、『改造』1933年10月号。

北河賢三(1995)「ファシズムと知識人」、由比正臣編『近代日本の歴史5 太平洋戦争』吉川弘文館。

小林秀雄(1937)a「戸坂潤氏へ」、『小林秀雄全集 第5巻』新潮社、2002年。

——(1937)b「「日本的なもの」の問題 I」、『小林秀雄全集 第5巻』新潮社、2002年。

鈴木貞美(2010)『『文芸春秋』とアジア太平洋戦争』武田ランダムハウスジャパン。

筒井清忠(2018)『戦前日本のポピュリズム』中央公論新社。

津田左右吉(1934)「日本精神について」『思想』1934年5月号。

戸坂潤(1935)a「インテリ意識とインテリ階級説」、『日本イデオロギー論』岩波書店 1977年。

——(1935)b「反動期に於ける哲学と文学——文学主義の錯覚に就いて」、『日本イデオロギー論』岩波書店 1977年。

——(1935)c「「文学的自由主義」の特質——自由主義者の進歩性と反動性」、『日本イデオロギー論』岩波書店 1977年。

内務省警補局(1938)『出版警察資料』31号。

古川隆久(2003)『戦時下の日本映画』吉川弘文館。

丸山真男(1961)『日本の思想』岩波書店。

宮本百合子(1937)「明日の言葉——ルポルタージュの問題——」、『文芸首都』1937年12月号。

山本三生編(1935)『改造年鑑 1935年版』改造社。

山本三生編(1936)『改造年鑑 1936年版』改造社。

横光利一(1935)「純粹小説論」、『改造』1935年4月号。